

『#KCIA 南山の部長たち』(2020年:ウ・ミンホ監督)をamazon prime videoで視聴した。本作は、新聞記者の金忠植のルポルタージュ『政治工作司令部 KCIA—南山の部長たち』を実名を避けてフィクションとして映画化した。第93回アカデミー賞国際映画賞の韓国代表に選ばれた。韓国国内の2020年の興行収入で第1位の売り上げとなった。

舞台は1979年の韓国、軍事クーデターで政権を握った朴正熙大統領が、18年間に亘り独裁体制を維持していた時代。民主化運動が高まりつつある中、政権の腐敗と暴力的な弾圧が国内外で問題視されていた。KCIA(韓国中央情報部)は大統領直属の諜報機関で、情報操作・監視・弾圧などを担う実質的な“影の政府”。南山に本部があったことから「南山の部長たち」と呼ばれる歴代トップは、大統領に次ぐ権力者とされていた。そんな中で、1979年10月26日、朴大統領はKCIAのトップであるキム・ギュピョン部長の手によって射殺された。

事件発生40日前、政府の隠密かつ違法な活動を知り尽くしていた元KCIA部長パク・ヨンガクは米国に亡命し、コリアゲートの捜査にあたっての重要参考人として下院議会聴聞会に呼ばれ、朴大統領を「革命への裏切り者」と証言し、大統領の腐敗を告発する(18年前に軍事クーデターを起こして大統領となり、KCIAを使って反対派を弾圧するなどの独裁政権を築いているが、その手法に対し徐々に海外からの批判が集まっている)。これに激怒した朴大統領はキム部長を米国に派遣し、パク元部長が出版しようとしている、朴大統領がスイスに保有する秘密資金口座の存在が記された回顧録が出版されないために手に入れるよう命じられる。パク元部長は回顧録をキム部長に渡すが、「イアーゴ」という男がいることを忠告する。その男は大統領の秘密口座を管理する真の右腕であり、KCIAはそのことを何も知らなかった。

キム部長が米国から帰国して間もなく、K警護室長が大統領官邸でCIAの盗聴器を発見する。それはKCIAも察知できていなかった事態だった。キム部長は大統領を守るためにあらゆる手段を講じるが、K室長との権力争いの中でやがて立場を失っていき、大統領からの信頼も失って追い詰められていく。

本作は、歴史再現を越えて、権力と倫理、忠誠と裏切り、そして国家の未来をめぐる人間ドラマとなっている。射殺犯の部長の描き方(善人として描かれ、革命の志を忘れず、民衆を思いやる気持ち)に疑問を感じないではないが・・・

評価:★★★★☆